

論文

韓国における多文化家族の親の生活問題と 児に対する不適切な育児行動の関連性

尹 靖水¹⁾・朴 志先²⁾・金 貞淑³⁾
黒木保博⁴⁾・中嶋和夫⁵⁾

要約：本調査研究は、多文化家族の韓国人の父親と結婚移住女性（母親）を対象に、日常的に経験する生活問題と児に対する不適切な育児行動の関連性を明らかにすることを目的とした。調査対象は、韓国 A・B 道の多文化家族支援センター 29 カ所を利用する多文化家族の父親 885 名と C・D 道の多文化家族支援センター 11 カ所を利用する多文化家族の母親 1,150 名とした。本調査研究では、Lazarus らのストレス認知理論と Hillson らの児童虐待発生モデルに基づき、韓国人の父親と結婚移住女性（母親）の生活問題（生活関連ストレスと育児関連ストレス）が児に対する不適切な育児行動を引き起こすと仮定した因果関係モデルを構築し、データへの適合性と変数間の関係性を構造方程式モデリングにより検討した。このとき、人口学的要因（本人の年齢、児の数、末子の年齢、家族形態）と個人特性要因（思いやり、コミュニケーション・スキル）を統制変数として投入した。結果、韓国の多文化家族の父親は育児関連ストレスが強いほど、また結婚移住女性（母親）では生活関連ストレスが強いほど、児に対する不適切な育児行動の頻度が高くなる傾向を示していた。以上の結果は、育児関連ストレスと生活関連ストレスで構成された多文化家族の生活問題を社会的な介入が必要な家族ニーズと見なし、そのニーズへの適切な対応が喫緊の課題であることを示唆している。

キーワード：多文化家族の親、生活問題、育児ストレス、生活ストレス、マルトリートメント

目次

1. 緒言
2. 理論的背景
 - 2-1. 不適切な育児行動（マルトリートメント）に関する発生要因モデル
 - 2-2. 多文化家族の生活問題
3. 研究方法
 - 3-1. 研究仮説
 - 3-2. 分析資料

¹⁾ 梅花女子大学文化表現学部教授，同志社大学社会学部非常勤講師

²⁾ 両備介護研究所研究員・交信著者

³⁾ 慶尚南道庁経済通商課主務官

⁴⁾ 同志社大学社会学部教授

⁵⁾ 岡山県立大学保健福祉学部教授

*2013年7月15日受付，2014年1月22日掲載決定

- 3-3. 調査内容
4. 研究結果
 - 4-1. 分析対象者の基本的属性の分布
 - 4-2. 各測定尺度の妥当性と信頼性の検討
 - 4-3. 多文化家族の親の生活問題と児に対する不適切な育児行動の関係
5. 考察

1. 緒言

1990年代以降、韓国では国際結婚が急増し、多文化家族の社会問題が顕在化した。多文化家族の多くは韓国人の男性と結婚移住女性で形成されている。2011年現在、韓国人の男性と結婚移住女性の組み合わせによる婚姻件数は22,265件で、国際婚姻総件数29,762件のうちの74.8%を占めており、また婚姻総数329,087件のうちの6.8%に達している（統計庁, 2012）。加えて、多文化家族の増加に伴いその子ども（国際児）の数も増加している。多文化家族の0歳～17歳までの児童数は2009年現在107,689人、その中で満7歳未満が64,040人を占めている（行政安全部, 2010）。このような現象が続くと、韓国では2020年には子ども5人のうち1人が国際児になると推測されている（Minister of public administration and security, 2009）。

他方、韓国の昨今の家庭環境を見ると、子どもにとってそれは必ずしも安心・安全な状況にあるわけではない。2011年の児童虐待事例総数6,058件に達し、そのうち多文化家庭内で発生した児童虐待事例総数は231件で、児童虐待事例総数の3.8%を占めている（行政安全部, 2011）。その割合は多文化家族の子どもの数を勘案すると多くはないが、多文化家族の被害児童の保護率は1.53%で、全被害児童の保護率0.63%に比して約2.4倍となっている。なお、虐待の発生場所は90.0%が家庭内であり、被害児童との続柄としては父親が57.1%、母親が28.1%となっており、加害者全体の8割以上が親で構成されている。また、虐待行為者の特徴は、養育態度及び方法の不足が31.3%と最も多く、次いで社会・経済的ストレス及び孤立（23.1%）、夫婦および家族葛藤（12.6%）の順となっている。このことから、育児や社会・経済的ストレスなど生活問題により虐待が発生している可能性は無視できないものと推察される（保健福祉部・中央児童保護専門機関, 2012）。親の不適切な育児行動の発生要因について検討した研究においても、親の育児行動は、育児ストレス、育児不安、親のパーソナリティー特性、夫婦関係、仕事、経済的状況、ソーシャル・ネットワークなどから影響を受けやすく、特に、親の育児負担感等のストレスは親の育児行動を左右する重要な要因とされ（Crnic et al., 1990；チョギュヨンら, 2010）、親役割の遂行のなかで認知される育児ストレスが高まると、子どもに対して身体的、言語的および心理的体罰など、強圧的で不適切な育児行

動を誘発するリスクが高くなるとされている（チョギュヨンら，2010）。

子どもの成長と発達には，家庭内の育児環境が非常に重要であり，育児は時間，文化，空間により変化し，文化的価値により影響を受けるもので，社会が保有する文化的価値と育児に対する見解により親は子育てをしていくことになる（Lee, 1998）。しかし，結婚移住女性は新しい文化や生活習慣に適応するなかで，ストレス状況に暴露されていることが知られている（尹靖水ら，2011；ヤンオクギョンら，2009；ナイスン，2008；ソホンランら，2008）。また他方では，結婚移住女性の83.7%が結婚後1年以内に初めて妊娠し，また初めての妊娠までの期間は平均6.6カ月となっているが，その中で出産や育児に対する教育を受けたことがあると回答した人は5.5%に過ぎない（Kim et al., 2008）とされている。結婚移住女性の多くが結婚生活及び言語，文化に十分適応できていないうちに母親になるため，母親のみならず子どもの健康にも悪影響を与えることが推察できる（キムティムら，2012.）。ソンソンファら（2011）の研究では，韓国生活に適応する前に妊娠と出産を経験し，韓国生活に対する適応と育児といった二重苦に直面しているケースが多いと報告されている。

加えて，伝統的に国際結婚に対し肯定的な認識よりは否定的な認識が強い傾向にある韓国社会では，結婚移住女性のみならず，国際結婚を選択した韓国人の男性も葛藤と緊張を抱えている。その傾向は多文化家族の韓国人の父親を対象とした生活問題やストレスに関する最近の研究結果からも納得されよう。韓国の父親は，一般的に，結婚生活の適応のなかで，様々な生活問題に直面しており，特に家族関係や経済的問題によるストレスを強く認知していることが報告されている（チュウヒョンファら，2008；柳漢守ら，2011；朴志先ら，2011）。また，育児期の韓国人の父親を対象に育児参加内容や頻度に関する調査がなされており，育児は主に母親が担当しているなかで，父親の子どもとの遊びや教育に参加する頻度は高いと報告されている（イジンスク，2007）。しかしながら，多文化家族の父親の育児ストレスに関する実証的な研究はほとんどなされていない。また，親の不適切な育児行動の発生要因に関する従来の研究の多くは，育児ストレスをその発生要因と想定しているが，育児を含めた日常生活のなかで遭遇する問題までも含めて検討した研究はほとんど見あたらない。多文化家族の親が抱えている育児問題を含めた生活問題と不適切な育児行動の関連性を明らかにできるなら，多文化家族の育児支援方策の開発にとって重要な知見が得られるものと期待できる。

そこで，本調査研究では，育児期にある多文化家族の育児支援方策の開発に資する基礎資料を得ることをねらいとして，韓国多文化家族の父親と結婚移住女性（母親）を対象に，日常的に経験する生活問題が児に対する不適切な育児行動にどのような影響を与えているかを明らかにすることを目的とした。

2. 理論的背景

2-1. 不適切な育児行動（マルトリートメント）に関する発生要因モデル

不適切な育児行動の発生要因に関連する理論研究としては、Lazarus ら（1984）のストレス認知理論ならびにその理論を基礎とする maltreatment 発生プロセスモデル（Hillson ら、1994）が代表的である。まず、Lazarus らにより提起されたストレス認知理論は多くの研究者から認められており、最近もこの理論に基づいたストレス研究が多くなされている。この理論では、ストレスは環境や刺激によるストレス要因に対して個人がどのように評価するかといった認知的評価により大きく左右される。また、認知的評価はストレスにどのように対処（coping）するかに影響を及ぼし、ひいては個人の精神、身体等の健康といったストレス反応にも影響を与えている。この理論に基づくなら、多文化家族の韓国人の父親と結婚移住女性（母親）においては、伝統的に国際結婚に対して肯定的認識よりは否定的認識が多い韓国社会で生活するなかで、葛藤や生活問題に抱えていると考えられ、その否定的感情が否定的対処行動として現れる可能性が想定できる。なお、Hillson らのモデルは育児期にある母親が親としての育児責任および児童の行動などによるイベントを経験（stressor）から始まる。このような経験をした母親はその経験を否定的に評価（cognitive appraisal）することになり、その状況に対して特定の対処行動（coping）を選択することになる。その行動について、Hillson らは、計画、援助要請（help-seeking）、肯定的再評価などのような適応的な対処行動、感情表出のような虐待行為、回避または逃避などのネグレクトを想定している。しかし、これまで行われてきた不適切な育児行動の発生要因については、育児ストレスを中心とした研究が多く、保護者が関わっている問題を総合的に扱って検討した研究はほとんど見当たらない。

そこで、本調査研究では、ストレス認知理論を基礎に Hillson らが提示したモデルが不適切な育児行動の発生要因を理解する上で有用であると判断し、前記モデルに基づいて多文化家族の韓国人の父親と結婚移住女性（母親）の不適切な育児行動とその発生要因、すなわち親が日常生活のなかで経験している問題との関係を実証的に検討するものとした。

2-2. 多文化家族の生活問題

ストレスは個人と環境の間に個人がもつ資源に対して反応できる水準を超えたり、または負担をかけたりすることで個人の健康に危険に処するとき発生する（Lazarus ら、1991）。Lazarus らによると、重大な生活事件（major life event）よりも日常生活（minor

life events)の中で経験する問題が個人の心理的健康がより予測できると述べている。

多文化家族の結婚移住女性(母親)を対象とした生活問題に関する研究を概観すると、生活問題を言語問題、結婚生活の中で経験する夫婦葛藤、結婚移住女性に関する偏見、妊娠と出産、子育ての過程で直面する困難、経済的問題など生活の中でさまざまな問題に直面していることが報告されている(尹靖水ら, 2011; ヤンオクギョンら, 2009; ナイムスン, 2008; ソンソンファら, 2011)。尹靖水ら(2011)は、結婚移住女性の生活ストレスを6つの領域(夫に対する否定的感情、家族・近隣に対する否定的感情、韓国文化に対する否定的感情、社会生活活動に関する制限感、経済的な逼迫感情、コミュニケーションに関する制限感)で構成している。さらに、その研究では、これらの生活ストレスを強く感じているほど抑うつ傾向が高まると指摘している。

また、多文化家族の韓国人の父親の生活問題に関する研究はほとんど蓄積されていないが、最近なされたいくつかの研究から韓国人の父親の日常で直面している生活問題を知ることができる。多文化家族の韓国人の父親は家族形成と維持していくなかで、家庭内外でさまざまな困難に直面する。家庭外では、周りの偏見や否定的態度に対応しないといけない状況であり、家庭内では、言語と文化が異なる外国人妻との生活に適応しないといけない(オムミョンヨン, 2010)。また、コリアン・ドリームを持って韓国にきた外国人女性においては、男性の経済力は重要な要因であるが、国際結婚をしている韓国人男性の多くは経済的余裕を持っているケースが少なく、結婚費用を準備するために借金をする場合もあり(ユンヒョンスク, 2004)、結婚移住女性のみならず、韓国人男性においても経済的問題がストレスとして作用する可能性があると推察される。また、柳漢守ら(2011)は、多文化家族の韓国人男性の生活ストレスを構造化し、それを妻に対する否定的感情、家族・近隣に対する否定的感情、経済的な逼迫感情の3因子で構成している。これらの研究成果により、多文化家族の韓国人父親と外国人母親は日常生活の中でさまざまな否定的感情等の生活問題に直面していることが推察できる。

一方、前記で述べたように Hillson らのモデルでは、不適切な育児行動の発生要因として養育で経験する日常生活の出来事を挙げている。これについて Crnic ら(1990)は子どもを養育するなかで経験するイライラ感に対する日常での出来事を Parenting Daily Hassles と表現している。親子関係は主な日常イベント(major life events)より日常生活で経験する出来事(daily hassles)がより重要なストレス要因になる。Kanner ら(1981)は毎日生じる日常的な出来事は同時多発的に生じる複合的な効果を出す可能性があることから、養育者にとって単純なひとつの主な生活イベントよりも威嚇的であると指摘している(キムヒョンヒ, 2008)。また、育児ストレスは親の精神的健康のみならず、子どもの問題行動など否定的な影響を与えると知られている(チョギュヨンら, 2010; 清水ら, 2008)。特に、就学前の児童期は子どもの情緒的・心理的発達に重要な

時期であり、この時期の親が経験するストレス要因を把握することは重要な課題である。このような育児場面での出来事を唐ら（2007）の研究では、育児関連 Daily Hassles (DH) とし、育児のなかで親としてしなければいけないことや親を困難にさせる児童の特性または気質として必ず克服しないといけないこと主な内容として不適切な育児行動との関連性を検証している。

従来の研究成果により不適切な育児行動を発生させる要因として多文化家族の親が抱えている経済、家族・近隣、生活問題や育児問題が想定されるが、多文化家族の親を対象に児に対する不適切な育児行動の発生要因として生活問題と育児問題を同時に検証した研究はほとんど見当たらない。

そこで、本調査研究では、Crnic らの Daily Hassles の概念に基づいて、多文化家族の生活問題を大きく「生活関連ストレス」と「育児関連ストレス」に分け、韓国人父親と結婚移住女性（母親）のデータにおいて、どのストレスが親の児に対する不適切な育児行動に強く影響を与えるかを検討することにする。

3. 研究方法

3-1. 研究仮説

本調査研究では、Lazarus らのストレス認知理論を基礎に Hillson らが開発した Maltreatment 発生プロセスモデルを援用し、韓国人の父親と結婚移住女性（母親）の生活問題（生活関連ストレスと育児関連ストレス）が児に対する不適切な育児行動を引き起こすと仮定した因果関係モデルを構築し、そのモデルのデータへの適合性と変数間の関係性を構造方程式モデリングにより検討した。このとき、従来の研究成果（Belsky, 1984；ソンヨンジら, 2011）を参考に人口社会的要因として親の年齢、児の数、末子の年齢、家族構成と親の個人特性要因として思いやりとコミュニケーション・スキルを統制変数として投入した。

3-2. 分析資料

本調査研究では、韓国の多文化家族の韓国人の父親ならびに結婚移住女性（母親）を対象とする無記名自記式の質問紙調査を実施した。調査にあたっては、韓国 A 道と B 道の多文化家族支援センター 29 カ所を利用する多文化家族の父親 885 名、C 道と D 道の多文化家族支援センター 11 カ所を利用する多文化家族の結婚移住女性（母親）1,150 名に調査票の配布を依頼した。調査期間は、2011 年 7 月から 2012 年 5 月まで実施した。調査に際しては、研究目的、倫理的配慮等について記載した依頼書を送付し、同意が得られた場合にのみ調査に参加することを依頼した。以上の調査に際しては、中国語

版、タガログ語版、タイ語版、ベトナム語版、日本語版を基本として準備し、他の国々に属する場合は英語版を使用した。翻訳は、翻訳の専門家に依頼し、各国数名のネイティブに予備調査を行いながら最終版を作成した。

統計解析には、回収された韓国人の父親 495 名、結婚移住女性（母親）675 名のうち、末子の年齢が満 7 歳未満であるデータを選定し、さらに分析に必要な変数に欠損値を有さない父親 229 名、母親 201 名のデータを用いた。

3-3. 調査内容

3-3-(a). 対象者の基本的属性

対象者の基本的属性として本人の年齢、末子の年齢、子どもの数、家族構成、思いやりとコミュニケーション・スキルと構成した。思いやりは、コミュニケーション・スキルは、またこれらの変数を統制変数として使用した。

3-3-(b). 生活関連ストレス

多文化家族の結婚移住女性（母親）の生活関連ストレスは、尹靖水ら（2011）が開発した計 24 項目 6 因子（夫に対する否定的感情、家族・近隣に対する否定的感情、韓国文化に対する否定的感情、社会生活活動に関する制限感、経済的な逼迫感情、コミュニケーションに関する制限感）の内容から構成される「(多文化家族妻用)生活ストレス測定尺度」を用いて測定した。各質問項目に対する回答と数量化は「0 点：全くそう感じない」「1 点：少しそう感じる」「2 点：かなりそう感じる」「3 点：とてもそう感じる」の 4 段階で求めるものとなっている。

また、多文化家族の韓国人の父親の生活関連ストレスは、柳漢守ら（2011）が開発した 12 項目 3 因子（「夫に対する否定的感情」「家族に対する否定的感情」「経済的逼迫感」）の内容から構成される「(多文化家族夫用)生活ストレス測定尺度」を用いて測定した。各質問項目に対する回答と数量化は「0 点：全くそう感じない」「1 点：少しそう感じる」「2 点：かなりそう感じる」「3 点：とてもそう感じる」の 4 段階で求めるものとなっている。

3-3-(c). 育児関連ストレス

育児に関連したストレスは、「日本版育児関連ディリーハッスル測定尺度」（これは、Cronic（1990）が開発した Parenting Daily Hassles Scale（PDH）を日本のデータを基礎に開発した短縮版）を参考に作成した。項目内容は、「子どもが散らかした玩具や食べ物の後片付けに追われる」「子どもの要求を満たすために、自分の計画を変更しなければならない」「子どもが 1 日に何度も服を汚すので、たびたび服を着替えさせなくてはならない」「子どもの要求を満たすために、余計な仕事が増える」「うるさくせがんだり、泣きごとを言ったり、文句をいう」「大人同士の会話などの邪魔をする」の計 6 項目で

構成している。各質問項目に対する回答は、最近6ヵ月間における育児関連ストレスがどの程度いらだたしいことであるかについて、「0点：まったくイライラしない」から「4点：とてもイライラする」までの5件法で尋ねた。

3-3-(d). 不適切な育児行動

多文化家族の韓国人の父親の子どもに対する不適切な育児行動の測定には、唐ら(2007)が開発した「マルトリートメント傾向指標」が用いられている。この尺度は、手をたたく、お尻をたたく、顔をたたくなどの「身体的虐待」に関する5項目、傷つくようなことをいう、子どもを馬鹿にする、褒めるより叱ることが多いなどの「心理的虐待」に関する7項目、子どもに食事を用意しない、具合が悪そうでも病院に連れて行かない、一人でご飯を食べさせるといった「ネグレクト」に関する3項目の計15項目から構成され、各質問項目に対する回答は、マルトリートメントの実施頻度について、「0点：全くない」から「4点：いつもある」の5件法となっている。

3-3-(e). 分析方法

本調査研究では、研究仮説を検証するために構造方程式モデリング(Structural Equation Modeling: SEM)を使用した。また、研究仮説に対する因果関係モデルの分析に先立ち、「育児関連ストレス」、「生活関連ストレス」、「不適切な育児行動」測定尺度に対する妥当性と信頼性を検討した。各測定尺度の妥当性の評価のため確認的因子分析を、信頼性の評価のため Cronbach's α 信頼性係数を算出した。また、因子構造モデルと因果関係モデルのデータに対する適合性は Comparative Fit Index (CFI) ならびに Root Mean Square Error of Approximation (RMSEA) で判断した。CFI は 0.90 以上、RMSEA は 0.10 未満であることを判断基準とした。なお標準化係数(パス係数)の有意性は、非標準化係数を標準誤差で除した値(以下 t 値)の絶対値が 1.96 (5% 有意水準)以上を示したものを統計学的に有意とした。以上の解析には、岡山県立大学所蔵の統計ソフト SPSS 12.0 J ならびに AMOS 5.0 J を使用した。

4. 研究結果

4-1. 分析対象者の基本的属性の分布

4-1-(a). 多文化家族の韓国人の父親の属性分布

多文化家族の韓国人の父親の平均年齢は 44.1 歳(標準偏差 5.8, 範囲 26~65 歳)であり、その結婚移住女性(母親)の平均年齢は 28.7 歳(標準偏差 5.8, 範囲 20~51 歳)であった。末子の年齢は 2.8 歳(標準偏差 1.8, 範囲 0~7 歳)であった。彼らの学歴は「高等学校相当」が 127 名(55.5%)と最も多く、次いで「中学校相当」が 40 名(17.5%)であった。職業は「農林畜産業」が 70 名(30.6%)と最も多く、次いで「会社員」

が53名(23.3%)であった。結婚移住女性(母親)の国籍は「ベトナム」が115名(50.2%)と最も多く、次いで「フィリピン」が39名(17.0%)、「中華人民共和国」が30名(13.1%)の順であった。児の数は、「1人」が最も多く124名(54.2%)であった。結婚経路は「商業的仲介業者の紹介」が144名(62.9%)と最も多く、次いで「韓国で国際結婚した友人の紹介」が23名(10.0%)の順であった。家族形態は「夫婦と子ども」が114名(49.9%)と最も多く、次いで「夫婦と子どもと自分の親」が96名(41.9%)の順であった。

4-1-(b). 結婚移住女性(母親)の属性分布

結婚移住女性(母親)の平均年齢は29.5歳(標準偏差5.8, 範囲20~56歳)であり、その韓国人の父親の平均年齢は42.6歳(標準偏差5.6, 範囲27~57歳)であった。末子の年齢は2.6歳(標準偏差1.6, 範囲0~7歳)であった。学歴は「高等学校相当」が70名(34.9%)と最も多く、次いで「中学校相当」が66名(32.8%)であった。職業は「専業主婦」が136名(67.5%)と最も多く、次いで「農林畜産業」と「単純労働」がそれぞれ10名(5.0%)であった。結婚移住女性(母親)の国籍は「ベトナム」が80名(39.8%)と最も多く、次いで「中華人民共和国」が66名(32.8%)、「フィリピン」が39名(19.4%)の順であった。児の数は、「1人」が最も多く122名(60.7%)であった。結婚経路は「商業的仲介業者の紹介」が104名(51.7%)と最も多く、次いで「韓国で国際結婚した友人の紹介」が39名(19.4%)の順であった。家族形態は「夫婦と子どもと義父母」が95名(47.2%)と最も多く、次いで「夫婦と子ども」が90名(44.8%)の順であった。

4-2. 各測定尺度の妥当性と信頼性の検討

4-2-(a). 多文化家族の韓国人の父親を対象とした測定尺度の検討

思いやり10項目を1因子モデルと仮定し、そのモデルに対するデータへの適合度を検討した。その結果、適合度はCFIが0.969, RMSEAが0.098と概ね統計学的な許容水準を十分満たしていた。また、Cronbach's α 信頼性係数を検討した結果0.955と良好な値を示した。思いやり10項目の合計得点は平均20.0点(標準偏差6.1)であった。

コミュニケーション・スキル6項目を1因子モデルと仮定し、そのモデルに対するデータへの適合度を検討した。その結果、適合度はCFIが0.987, RMSEAが0.086と概ね統計学的な許容水準を十分満たしていた。また、Cronbach's α 信頼性係数を検討した結果0.918と良好な値を示した。コミュニケーション・スキル6項目の合計得点は平均16.7点(標準偏差4.8)であった。

育児関連ストレス6項目を1因子モデルと仮定し、そのモデルに対するデータへの適合度を検討した。その結果、適合度はCFIが0.994, RMSEAが0.049と統計学的な許容

表1 対象者の基本的属性の分布

カテゴリー	韓国人父親 (n = 229)	外国人母親 (n = 201)
年齢：本人	平均±標準偏差（範囲）	平均±標準偏差（範囲）
配偶者	44.1 歳 ± 5.8 (26~65 歳)	29.5 歳 ± 5.8 (20~56 歳)
末子	28.7 歳 ± 5.8 (20~51 歳)	42.6 歳 ± 5.6 (27~57 歳)
	2.8 歳 ± 1.8 (0~7 歳)	2.6 歳 ± 1.6 (0~7 歳)
	名 (%)	名 (%)
学歴：小学校以下	12 (5.2)	28 (13.9)
中学校相当	40 (17.5)	66 (32.8)
高等学校相当	127 (55.5)	70 (34.9)
短期大学・専門学校相当	29 (12.7)	24 (11.9)
大学	16 (7.0)	9 (4.5)
大学院	5 (2.1)	4 (2.0)
職業：農林畜産業	70 (30.6)	10 (5.0)
単純労働	23 (10.0)	10 (5.0)
生産業	28 (12.2)	8 (4.0)
会社員	53 (23.3)	7 (3.5)
販売業	9 (3.9)	3 (1.5)
専門職	6 (2.6)	8 (4.0)
専業主婦（夫）	6 (2.6)	136 (67.5)
公務員	4 (1.7)	7 (3.5)
その他	30 (13.1)	12 (6.0)
国籍（夫は配偶者）：中華人民共和国	30 (13.1)	66 (32.8)
ベトナム	115 (50.2)	80 (39.8)
日本	15 (6.6)	1 (0.5)
フィリピン	39 (17.0)	39 (19.4)
カンボジア	14 (6.1)	4 (2.0)
インドネシア	6 (2.6)	1 (0.5)
その他	10 (4.4)	10 (5.0)
児の数：1 人	124 (54.2)	122 (60.7)
2 人	82 (35.8)	68 (33.8)
3 人以上	23 (10.0)	11 (5.5)
結婚経路：商業的仲介業者の紹介	144 (62.9)	104 (51.7)
宗教団体の紹介	19 (8.3)	8 (4.0)
韓国で働いている家族・親族の紹介	22 (9.6)	24 (11.9)
韓国で国際結婚した友人の紹介	23 (10.0)	39 (19.4)
外国人労働者として韓国で恋愛	8 (3.5)	10 (5.0)
その他	13 (5.7)	16 (8.0)
家族形態：夫婦と子ども	114 (49.9)	90 (44.8)
夫婦と子どもと夫婦の兄弟姉妹	6 (2.6)	2 (1.0)
夫婦と子どもと義父母（義父母のいずれでも可）	4 (1.7)	95 (47.2)
夫婦と子どもと自分の親（父母のいずれでも可）	96 (41.9)	3 (1.5)
夫婦と子どもと自分の親と夫婦の兄弟姉妹	8 (3.5)	7 (3.5)
その他	1 (0.4)	4 (2.0)

水準を十分満たしていた。また、Cronbach's α 信頼性係数を検討した結果 0.914 と良好な値を示した。育児関連ストレス 6 項目の合計得点は平均 5.4 点（標準偏差 4.1）であった。

生活関連ストレス 3 因子 2 次因子モデルと仮定し、そのモデルに対するデータへの適合度を検討した。その結果、適合度は CFI が 0.943, RMSEA が 0.097 と統計学的な許容水準を十分満たしていた。また、Cronbach's α 信頼性係数を検討した結果 0.900（妻に

対するストレス：0.884，家族・近隣に対するストレス：0.894，経済的ストレス：0.914）と良好な値を示した。生活関連ストレス 12 項目の合計得点は平均 6.7 点（標準偏差 6.4）であった（妻に対するストレス：2.0（標準偏差 2.5），家族・近隣に対するストレス：1.5（標準偏差 2.4），経済的ストレス：3.2（標準偏差 2.4））。

不適切な育児行動を 3 因子斜交モデルと仮定し，モデルに対するデータへの適合度を検討した。その結果，CFI が 0.932，RMSEA が 0.097 と統計学的な許容水準をおおむね満たしていた。また，Cronbach's α 信頼性係数を検討した結果，「心理的虐待」が 0.913，「身体的虐待」が 0.867，「ネグレクト」が 0.827 と良好な値を示した。不適切な育児行動において心理的虐待 7 項目の合計得点は平均 6.4 点（標準偏差 4.6），身体的虐待 5 項目の合計得点は平均 3.7 点（標準偏差 3.1），ネグレクト 3 項目の合計得点は平均 2.0（標準偏差 2.1）であった

4-2-(b). 結婚移住女性（母親）を対象とした測定尺度の検討

思いやり 10 項目を 1 因子モデルと仮定し，そのモデルに対するデータへの適合度を検討した。その結果，適合度は CFI が 0.966，RMSEA が 0.094 と概ね統計学的な許容水準を十分満たしていた。また，Cronbach's α 信頼性係数を検討した結果 0.947 と良好な値を示した。思いやり 10 項目の合計得点は平均 20.7 点（標準偏差 6.1）であった。

コミュニケーション・スキル 6 項目を 1 因子モデルと仮定し，そのモデルに対するデータへの適合度を検討した。その結果，適合度は CFI が 0.980，RMSEA が 0.096 と概ね統計学的な許容水準を十分満たしていた。また，Cronbach's α 信頼性係数を検討した結果 0.887 と良好な値を示した。コミュニケーション・スキル 6 項目の合計得点は平均 17.4 点（標準偏差 4.6）であった。

育児関連ストレス 6 項目を 1 因子モデルと仮定し，そのモデルに対するデータへの適合度を検討した。その結果，適合度は CFI が 0.987，RMSEA が 0.080 と統計学的な許容水準を十分満たしていた。また，Cronbach's α 信頼性係数を検討した結果 0.917 と良好な値を示した。育児関連ストレス 6 項目の合計得点は平均 7.0 点（標準偏差 5.1）であった。

生活関連ストレス 6 因子 2 次因子モデルと仮定し，そのモデルに対するデータへの適合度を検討した。その結果，適合度は CFI が 0.902，RMSEA が 0.086 と統計学的な許容水準を十分満たしていた。また，Cronbach's α 信頼性係数を検討した結果 0.952（夫に対する否定的感情：0.890，家族・近隣に対する否定的感情：0.936，韓国文化に対する否定的感情：0.862，社会生活活動に関する制限感：0.831，経済的逼迫感：0.881，コミュニケーションに関する制限感：0.894）と良好な値を示した。生活関連ストレス 24 項目の合計得点は平均 21.4 点（標準偏差 15.2）であった（夫に対する否定的感情：3.5（標準偏差 3.2），家族・近隣に対する否定的感情：3.4（標準偏差 3.6），韓国文化に対す

る否定的感情：4.5（標準偏差 3.2），社会生活活動に関する制限感：3.5（標準偏差 2.9），経済的逼迫感：3.3（標準偏差 3.2），コミュニケーションに関する制限感：3.2（標準偏差 3.0）。

不適切な育児行動を 3 因子斜交モデルと仮定し，モデルに対するデータへの適合度を検討した。その結果，CFI が 0.941，RMSEA が 0.109 と概ね統計学的な許容水準をおおむね満たしていた。また，Cronbach's α 信頼性係数を検討した結果，「心理的虐待」が 0.945，「身体的虐待」が 0.905，「ネグレクト」が 0.895 と良好な値を示した。心理的虐待 7 項目の合計得点は平均 6.6（標準偏差 5.8），身体的虐待 5 項目の合計得点は平均 4.4（標準偏差 3.9），ネグレクト 3 項目の合計得点は平均 2.4（標準偏差 2.7）。

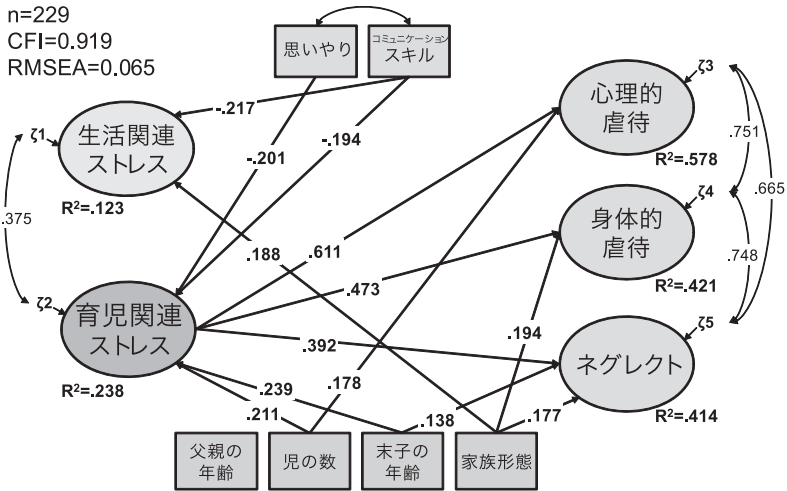
4-3. 多文化家族の親の生活問題と児に対する不適切な育児行動の関係

4-3-(a). 韓国人の父親の因果関係モデルの検討

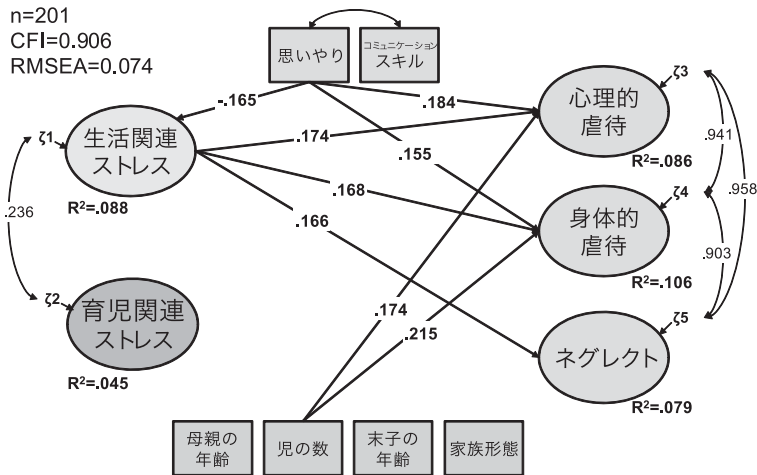
因果関係モデルのデータに対する適合度は，CFI が 0.919，RMSEA が 0.065 と統計学的な許容水準を満たす結果であった（図 2）。各変数間の関連性に着目すると，育児関連ストレスから心理的虐待に向かうパス係数が 0.611，身体的虐待に向かうパス係数が 0.473，ネグレクトに向かうパス係数が 0.392 と不適切な育児行動のすべての因子に有意な正の関連性を示していた。ただし，生活関連ストレスと児に対する不適切な育児行動の関連性は支持されなかった。また，統制変数として投入した変数のうち，育児関連ストレスには思いやり ($\gamma = -0.201$)，コミュニケーション・スキル ($\gamma = -0.194$)，児の数 ($\gamma = 0.211$)，末子の年齢 ($\gamma = 0.239$) が有意な関連性を示しており，生活関連ストレスにはコミュニケーション・スキル ($\gamma = -0.217$)，家族形態 ($\gamma = 0.188$) が有意な関連性を示していた。心理的虐待には児の数 ($\gamma = 0.178$)，身体的虐待には家族形態 ($\gamma = 0.194$)，ネグレクトには末子の年齢 ($\gamma = 0.138$)，家族形態 ($\gamma = 0.177$) が有意な関連性を示していた。

4-3-(b). 結婚移住女性（母親）の因果関係モデルの検討

因果関係モデルのデータに対する適合度は，CFI が 0.906，RMSEA が 0.074 と統計学的な許容水準を満たす結果であった。各変数間の関連性に着目すると，生活関連ストレスが児に対する不適切な育児行動のすべての因子に有意な正の関連性を示していた（心理的虐待： $\gamma = 0.174$ ，身体的虐待： $\gamma = 0.168$ ，ネグレクト： $\gamma = 0.166$ ）。ただし，育児関連ストレスと児に対する不適切な育児行動の関連性は支持されなかった。また，統制変数として投入した変数のうち，生活関連ストレスには思いやり ($\gamma = -0.165$) が有意な関連性を示していたが，育児関連ストレスにはいずれの変数も有意な関連性を示していなかった。心理的虐待には児の数 ($\gamma = 0.174$)，身体的虐待には児の数 ($\gamma = 0.215$) が有意な関連性を示していた。



注 1) 図の複雑さを避けるため、統計学的に非有意であったパスと観測変数間の相関関係の表示は省略する。
 図 1 韓国人の父親の生活問題と児に対する不適切な育児行動の関係 (標準化解)



注 1) 図の複雑さを避けるため、統計学的に非有意であったパスと観測変数間の相関関係の表示は省略する。
 図 2 結婚移住女性 (母親) の生活問題と児に対する不適切な育児行動の関係 (標準化解)

5. 考 察

本調査研究では、養育者が日常的に経験する生活問題（生活関連ストレス，育児関連ストレス）と児に対する不適切な育児行動との関連性を，育児期にある多文化家族の韓国人の父親と結婚移住女性（母親）のデータを基礎に検討した。統計解析では，生活関連ストレスおよび育児関連ストレスを独立変数，児に対する不適切な育児行動を従属変数，思いやり，コミュニケーション・スキル，児の数，家族形態を統制変数とする因果関係モデルを構築し，そのモデルのデータへの適合性と変数間の関連性を構造方程式モデリングで把握した。

本調査研究では、前記因果関係モデルのデータへの適合性の検討に先立って、測定尺度の妥当性ならびに信頼性について検討した。その結果、解析に用いたデータにおいて、生活関連ストレス、育児関連ストレス、不適切な育児行動の3つの測定尺度の因子構造モデルの側面からみた構成概念妥当性ならびに内的整合性からみた信頼性が支持された。今後、多文化家族が増加することを考慮するなら、生活問題の測定尺度が開発できたことは、彼らの生活問題の関連要因を解明する上で重要な役割を果たすものと期待できよう。

次いで本調査研究では、あらかじめ構築した因果関係モデルがデータに適合することを明らかにし、多文化家族の韓国人の父親と結婚移住女性（母親）の解析結果を比較すると、児に対する不適切な育児行動にはそれぞれ異なるストレス問題が関連していることを明らかにした。このような結果は、生活問題といったストレス認知が不適切な育児行動といった対処行動に有意な関連性を持つという Lazarus らのストレス認知理論とそれを援用した Hillson らの研究を支持されたことを意味するが、他方では、以下のように多文化家族の育児支援方策の開発のために必要な知見が得られたことを意味している。具体的には、第一に、多文化家族の韓国人の父親のデータでは、育児関連ストレスを強く評価している父親ほど心理的虐待、身体的虐待、ネグレクトといった不適切な育児行動の頻度が高い傾向にあることが明らかとなった。多文化家族の父親を対象とした研究はないため、直接比較はできないが、韓国家族の父親を対象とした従来の研究においては、育児ストレスが強まると拒否的な育児行動を起こしやすいといった知見が多数報告されている (Abidin, 1992; Cho et al., 2010; Lee et al., 2008; Kim et al., 2009; Simons et al., 1993)。本調査研究の結果は、多文化家族の韓国人の父親の場合、生活関連ストレスよりは育児場面でのストレスに起因する不適切な育児行動がものであり、従来の研究結果とほぼ一致するものであった。また、このような結果は、一般的に母親より育児参加頻度が少ない韓国人の父親において、子どもに対する未熟な関わりが関連しているものと推察される。さらに、直系家族制度に基づく家父長的家族制度が基盤にある今日の韓国の家族関係は、子どもの独立心や自立心を促す必要を感じておらず、逆に、親に頼り、従い、協調することが大切と考えていることを反映している結果ではないかと考えられる (竹並, 1994)。また、韓国の父親にとって子どもが自分に従わないということが大きなストレスとなり、子どもに対する訓育のひとつとして暴力的な行動に表出されたのではないかと推察される。本調査研究で測定した育児ストレスは親としてしなければいけないことや親を困難にさせる児童の特性または気質として必ず克服しないといけないことと構成されており、このことを考慮するなら、子どもを育てることに対する父親の過度な負担を軽減させるような支援が必要である。例えば、子育てにおける親の役割、子育ての仕方や子育ての楽しさなど父親としての正しい訓育法に関する

情報を提供することで、不適切な育児行動を防ぐことができると考えられる。

ただし、多文化家族の韓国人の父親の生活関連ストレスは不適切な育児行動に直接影響を及ぼしていなかった。彼らの生活関連ストレス、育児関連ストレス、不適切な育児行動の相関関係に着目するなら、生活関連ストレスと不適切な育児行動の相関係数は0.197~0.275とやや低い相関関係を示しており、育児関連ストレスと不適切な育児行動の相関係数は0.471~0.660とやや強い相関関係を示していた。このことから、生活関連ストレスより育児関連ストレスが不適切な育児行動とより強い関連性を持っており、不適切な育児行動への生活関連ストレスの強さが希薄化したものではないかと考えられる。なお、統制変数として投入した思いやり、コミュニケーション・スキル、児の数、末子の年齢が育児関連ストレスに直接有意な関連性を示しており、心理的虐待には児の数が、身体的虐待には家族形態が、ネグレクトには家族形態と末子の年齢が有意な関連性を示していた。また、生活関連ストレスにはコミュニケーション・スキルと家族形態が関係していた。これらの結果により、まず思いやりやコミュニケーション・スキルといった父親のパーソナリティ特性は内的資源として彼らの育児関連ストレスを低下させる有効な活用資源であることを示唆するものであった。また、児の数が多いほど、末子の年齢が低いほど、育児関連ストレスが高くなり、さらに不適切な育児行動の頻度が多くなるという結果であった。また、2世代世帯より3世代世帯の韓国人父親が生活関連ストレスを強く感じており、身体的虐待の頻度も多い傾向となっていた。しかし、因果関係モデルを総合的にみると、それら統制変数の独立変数と従属変数への影響度は独立変数と従属変数の関係に統計学的に影響を与えるほどの高い値ではなかった。

第二に、多文化家族の結婚移住女性（母親）では、生活関連ストレスを強く評価している母親ほど心理的虐待、身体的虐待、ネグレクトといった不適切な育児行動の頻度が高いことが示された。ただし、育児関連ストレスは不適切な育児行動に直接有意な影響を及ぼしていなかった。養育者が養育過程で認知するストレスが育児行動に非常に大きい影響を与えるといった結果が一般的であるが（Abidin, 1990）、本調査研究では、育児関連ストレスと不適切な育児行動の関連性は支持されなかった。このことは、結婚移住女性（母親）の場合、育児に対するストレスよりは生活に対するストレス、例えば、夫や家族・近隣との関係によるストレスや経済的問題、コミュニケーションが十分できない問題に直面すると、子どもに対して強圧的で否定的な行動につながることを示唆する結果である。結婚移住女性の母性経験に関する研究では、韓国への移住と妊娠がほぼ同時に生じ、その二重ストレスにより、妊娠に対する後悔や子供に対する敵愾心が生じるケースを報告しており（キムタイムら、2012）、結婚移住女性（母親）のそのような心理が児に対する不適切な育児行動として表出したのではないかと考えられる。また、韓国人同士の夫婦で形成された家族と同様に、多文化家族においても育児は主に外国人母

親が担当していることから（ソルドンフン，2009），韓国文化や韓国語に十分慣れていない状況で子育てを並行する結婚移住女性（母親）はその負担感を強く感じ，生活のストレスが解消できる適切な対処方法を見つけることができず，子どもに対して不適切な行動をとるといった結果ではないかと思われる。韓国語能力が十分でない外国人母親においては子どもに言語を通して十分に伝えることができず，虐待行為に至ってしまったことも考えられる。また，統制変数として投入した思いやりは生活関連ストレスと心理的虐待，身体的虐待に有意な関連性を示しており，児の数は心理的虐待と身体的虐待に有意な関連性を示していた。このことは，思いやりは生活関連ストレスを軽減させる個人の重要な資源であることを示唆するものである。しかし，思いやりの心理的虐待と身体的虐待に対する関連性は正の方向を示していたが，それら変数間の相関関係も正の関連性であり，多重共線性の問題ではなかったため，この結果については更なる検討が必要である。なお，結婚移住女性（母親）は，児の数が多いほど，児に対する心理的虐待や身体的虐待の発生頻度が多くなっていたが，この結果は従来の研究結果を支持するものであり（大原，2003），結婚移住女性（母親）の育児責任が分担できるような育児サポートシステムの必要性を意味するものであった。

以上，本調査研究では，多文化家族の韓国人の父親と結婚移住女性（母親）において，日常的に経験する生活問題が親の児に対する不適切な育児行動に影響する要因であることを明らかにした。具体的には，多文化家族の韓国人の父親では日常生活問題のうち，育児関連ストレスが強くなるほど児に対する不適切な育児行動の発生頻度が高くなる傾向にあり，結婚移住女性（母親）では日常生活問題のうち，生活関連ストレスが強くなるほど児に対する不適切な育児行動の発生頻度が高くなる傾向にあった。この結果は，学問的には，Lazarus らのストレス認知理論と Hillson らのマルトリートメント発生要因モデルを支持する結果であると推察された。なお，臨床的には生活関連ストレスと育児関連ストレスで構成された多文化家族の生活問題をニーズと見なすなら，多文化家族の韓国人の父親に対しては育児ストレスを，結婚移住女性（母親）に対しては生活ストレスを軽減できる適切な介入や支援方策が喫緊の課題であることが示唆された。

参考文献

- イジンスク（2007）「国際結婚家庭の子育て実態と父親の育児参加に関する研究」『開く幼児教育研究』12（6）：21-42.
- 大原美知子（2003）「母親の虐待行動とリスクファクターの検討－首都圏在住で幼児をもつ母親への児童虐待調査から－」『社会福祉学』43（2）：46-57.
- オムミョンヨン（2010）「結婚移住女性の韓国人夫に対する生涯史研究」『韓国家族関係学会誌』14（4）：261-298.
- キムタイムほか2人（2012）「結婚移住女性の母性経験に関する現象学的研究－都市居住移住女性を中心として－」『女性健康看護学会誌』18（2）：85-97.

- キムヒョンヒ (2008) 「母親が認知する Parenting Daily Hassles が育児ストレスおよび不適切な育児行動に与える影響」『ケミョン大学大学院博士学位論文』
- 行政安全部 (2010) 『外国人住民現況調査結果』
- 行政安全部 (2011) 『外国人住民調査現況』
- 清水尚子ほか3人 (2008) 「育児期における父親の育児ストレス、ストレス対処、ストレス反応の関連」『京府医大看護紀要』17: 79-86.
- ソンソンファ・アンヒョジャ (2011) 「フィリピン結婚移住女性の子供養育経験」『精神看護学会誌』20(2): 167-179.
- ソホンランほか2人 (2008) 「ベトナム女性結婚移民者の養育ストレスに影響を与える要因に関する研究」『韓国家族関係学会誌』13(3): 121-143.
- ソルドンフン (2009) 「国内結婚移民者の養育と教育—小児を中心に—」『韓国精神医学』52(4): 403-409.
- ソンヨンジ・パクソンヨン (2011) 「母親の養育ストレスと養育行動との関係: 性格の媒介効果」『人間発達研究』18(2): 125-144.
- 竹並正宏 (1994) 「韓国の家族制度—R. ジャネリの祖先祭祀と韓国社会を参考に—」『川崎医療福祉学会誌』4(2): 153-156.
- 唐軼斐ほか2人 (2007) 「母親の育児関連 DailyHassles と児に対するマルトリートメントの関連」『厚生学の指標』54(4): 13-20.
- チュウヒョンファほか3人 (2008) 「結婚移住女性の夫の家族ストレス、社会的支持が結婚適応に与える影響」『韓国家族福祉学』13(4): 85-101.
- チョギュヨンほか2人 (2010) 「学齢前期の児童の問題行動と母親の育児ストレスおよび拒否的育児態度」『児童看護学会誌』16(2): 136-143.
- 統計庁 (2012) 『婚姻離婚統計』
- ナイスン (2008) 「外国人結婚移住女性のストレスに影響を与える要因」『韓国非営利研究』7(1): 97-135.
- 朴志先ほか4人 (2011) 「多文化家族の夫の妻に対する否定的感情と心理的虐待の関係」『第10次国際高麗学会発表資料』
- 保健福祉部・中央児童保護専門機関 (2012) 『2011 全国児童虐待現況報告書』
- 柳漢守ほか3人 (2011) 「多文化家族の夫の日常生活に関連したストレス問題」『湖南大学女性文化研究』5(1): 67-90.
- ヤンオクギョンほか2人 (2009) 「ソウル地域の結婚移住女性の文化適応ストレスに関する研究」『韓国家族関係学会誌』14(1): 137-168.
- 尹靖水ほか3人 (2011) 「韓国における国際結婚移民女性の生活に関連したストレス問題と精神的健康の関係」『東アジア研究』55: 35-50.
- ユンヒョンスク (2004) 「国際結婚配偶者の葛藤と適応」チョエヒョップら編『韓国の少数者の実態と展望』ソウル: ハンウル.
- Abidin, R. R (1992) *The determinants of parenting behavior*, Journal of Clinical Child Psychology, 21: 407-412.
- Belsky, J (1984) *The determinants of parenting: A process model*, Child Development, 55: 83-96.
- Cho, K · Eo, Y. S · Ahn, M. S (2010) *Children's Behavior Problems, Child-rearing Stress and Rejective Parenting Attitude in Preschool Children's Mothers*, J Korean Acad Child Health Nurs, 16(2) : 136-143.
- Cmic, K. A · Greenberg, M. T (1990) *Minor parenting stresses with young children*, Child Development, 61(5) : 1628-1637.
- Hillson, J. C · Kuiper, N. A (1994) *A stress and Coping Model and Child Maltreatment*, Clinical Psychology Review, 14: 261-285.
- Kim, H. H · Park, C. M · Lee, J. R · Shin, H. S (2009) *Effects of Parenting Stress and Maltreatment on Mather's Perception of Parenting Daily Hassles*, J. of The Korean Society Maternal and Child Health, 11(1) : 79-91.
- Kim, H. R · Hwang, N. M · Jang, I. S · Yoon, K. J · Kang, B. J (2008) *The study of reproductive health and policy*

in foreign immigrant women, Seoul : Kihasa.

- Lazarus, S · Folkman, S (1984) *STRESS, APPRAISAL, & COPING* (= 1991, 本明寛・春木豊・織田正美監訳『ストレスの心理学認知的評価と対処の研究』実務教育出版)
- Lazarus, R. S · Folkman, S (1991) *The concept of coping*, In A. M. Monat and R. S. Lazarus (Eds.), *Stress and coping : An anthology* (3rd ed.) (pp.189–206). New York : Columbia University Press.
- Lee, S. Y (1998) *A concept analysis of the rearing*, *Journal of Korean Academy of Child Health Nursing*, 4 : 76–85.
- Lee, Y. h · Lee, J. I (2008) *The exploration for factors explaining Korean mothers' acceptance-rejection and control of their children at ages of zero to 36 months*, *The Korean Society of Women's Culture*, 17 : 87–119.
- Minister of public administration and security (2009) *2009 Local government : Survey results of foreign residents*.
- Simons, R. L · Beaman, J · Conger, R. D · Chao, W (1993) *Stress, Support, and Antisocial Behavior Trait as Determinants of Emotional Well-Being and Parenting Practices Among Single Mothers*, *Journal of Marriage and Family*, 55(2) : 385–398.

The Relationship between Life Problems and Child Maltreatment of Multi-cultural Family Parents in Korea

Jungsoo Yoon, Jisun Park, Jungsuk Kim, Yasuhiro Kuroki and Kazuo Nakajima

The purpose of this research is to clarify the relationship between daily life problems and child maltreatment of multi-cultural family parents in Korea. In this study, 885 Korean fathers using 29 multi-cultural family support centers in A · B city, and 1,150 women immigrants (foreign mothers) married to Korean men using 11 multi-cultural family support centers in C · D city were surveyed. We designed the causal model to examine the relations between life problems (life stress and child-care stress) of Korean fathers and women immigrants(mothers) and child maltreatment based on stress cognitive theory of Lazarus et al. and child maltreatment process model of Hillson et al. And this model was examined by using structural equation modeling. The control variables were introduced as demographic factors (age, the number of children, age of the youngest child, family structure) and personal characteristics factors (compassion, communication skills) in causal model. This research have shown that the stronger the Korean fathers' childcare stress levels, and the stronger the women immigrants' (mothers') parenting stress levels, the higher the frequency of child maltreatment. In order to prevent child maltreatment, it was suggested that life problems configured in the child-care stress and life stress of multi-cultural family parents were considered the needs of families in need of social intervention, and the appropriate response to their needs is a pressing issue.

Key words : Multi-cultural family parents, Life problems, Childcare stress, Life stress, Child maltreatment